



北岡泰典特別書き下ろしエッセイ

「メタ心理学」誕生の 経緯について

written by 北岡 泰典

September 2023

著作権: (株) オフィス北岡

<https://www.office-kitaoka.co.jp>

目次

- 0. 前書き：過去の自分への「鎮魂歌」**
- 1. 「メタ心理学」誕生の経緯について**
- 2. 「自己啓発難民状態」から「真の成功者状態」への変容を
可能にする実践的「メタ心理学」**
- 3. 後書き**

0. 前書き：過去の自分への「鎮魂歌」

思えば、私の人生は、最下層の「自己啓発難民」から（私なりの定義での）「真の成功者」への変容の人生でした。

私のもっとも古いはっきりした幼少期の記憶は、4歳の時に、父親が乗っていた自転車の後部座席に座っていて、「施設に入るか?」と聞かれて、「うん、そうするよ」と答えた出来事でした。

それ以前の記憶はほとんどありませんが、母親によると、生後4ヶ月で「脳性麻痺」に罹り、40度くらいの高熱が出て、3日間白目を向いていて、小児科の先生には「この子は助からない」と言われた後、この先生が脳髄液を抜いたので脳圧が下がり、命は助かったが、左半身の麻痺が残った、ということでした。

上述の出来事では、両親が、私が生まれ育った地方小都市から100キロ離れた県庁所在地にあったカトリック系の養護施設に私を預けようとして、私の意向を確かめた次第でした。

この後、私は1年くらい施設に収容されましたが、幼児性愛に関連したトラウマ事件があり、私は「社会的不適合者」になりました。

小学校は普通の学校に入学しましたが、4年生の時に、近くの郡に新しい養護施設が開園されたので、私は再度施設体験をして、左足のアキレス腱を伸ばす手術を受けたりしました。この施設には6年生までいて、その後、普通の中学校に入学しましたが、この施設でも極度の幼児性愛的なトラウマ経験をもっていました。

その後の（社会的不適合者としての）私の人生については、別のところで書いたり、ワーク中に話したりしてきていますが、要は、高卒後、二浪の末入学した都内の大学を25歳で卒業し、3年間サハラ砂漠で仏語通訳に従事して、1983年に米国西海岸でインド人導師に弟子入りするまでは、上述のように「最下層の『自己啓発難民』」だった、という自己認識があります。

その後、瞑想の修行をしながら、私にとっては「蟻地獄」のような自己啓発難民状態から抜け出す努力をし始め、1988年の英国で共同開発者のジョングリンダー式 NLP（神経言語プログラミング）に出会った時に、その確たる脱出法の存在を知り、その後は、その方法を実践的に習得し始め、日本に帰国した2001年頃までには「蟻地獄からの完全脱出」を成功させていました。

その後、国内で、「自己啓発難民状態から真の成功者状態」に変容できるメソッドを教えてきていましたが、元々欧米人仕様の成功法則として生まれた NLP を日本人仕様にアップデートした「メタ心理学」を、今年の初めに創始しました。

現在私の周りにいる人々で、私の「ビッフォア／アフター」を比較できる人は誰もいませんが、「ビッフォア」を知っている「唯一」の人間である私は、「メタ心理学」は、1988年以前の最下層の自己啓発難民だった自分自身への「鎮魂歌」として位置づけることができていると思っています。

なお、本エッセイの内容は、現在配信中の「メタ心理学」メルマガ第五号の内容を「敷衍」／拡張したものになっています。

2023年9月
北岡泰典

1. 「メタ心理学」誕生の経緯について

現在配信中の「メタ心理学」メルマガ第五号で「『メタ心理学』誕生の経緯について」を書かせていただきました (<https://www.kitaoka.co/newsletter/005.htm>)。

以下、「前半部」を引用させていただきます。

本メルマガの各号で、「メタ心理学メルマガ創刊キャンペーン予告」告知をさせていただいてきていますが、キャンペーンは近日中、次号【第六号】において、開始される予定です。

つきましては、本号では、改めて、『メタ心理学』の誕生の経緯について述べてみたいと思いました。

まず、よく見られるマーケティング手法として、同じ使い古されたコンテンツに「新しいネーミング」をつけて、顧客の方々に何か別のワークであると思わせるテクニックがあると思いますが、以下に記した何点かの内容を理由として、「メタ心理学」のネーミングとコンテンツに関しては、そういう「批判」は当たらない、と思っています。

1) 私（北岡）は、1988 年に英国で、「本場直伝の NLP」を学び始め、2001 年に帰国した後、(12 年間) 資格認定コースで NLP を教えていましたが、数年前 (2015 年頃) まで、「守破離」の「守」に徹しきり、いっさい独自のテクニックを開発したりしてはきていませんでした。

2) その中で、2015 年頃、「エグゼクティブ ライフ コーチング」の個人セッション クライアントの方に「私には、北岡さんの NLP テクニックの実際の現場での落とし込み方がわかりません」という、私には意味のわからないことを言われ、かなりのショックを受け、2、3 週間「内省」した後、自分自身がどのように、1988 年の NLP 学習開始時から、「無意識的に」NLP テクニックを実際の現場での落とし込んできていたのか、を自己モデリングした結果、「RPG ゲーム」というテクニックの独自開発に成功しました。

(ちなみに、「RPG ゲーム」ワークを施術させていただいたこの会社経営者のエグゼクティブ クライアントの方からは、後になって、「会社の年間売上が 8,000 万円から 4 億円になりました」という報告を受けました。)

3) 実質上、「RPG ゲーム」が私の初めての独自開発テクニックだったのですが、この時、私は、27 年間の「守」のフェーズを終え、「破」のフェーズに入った次第です（「メタ心理学」のネーミングを使い始めたのは、今年の始めですが、この時点

で、私は、7 年間の「破」のフェーズを終え、最終的に「離」のフェーズに入った、ということになります)。

4) 実は、「RPG ゲーム」ワークは、「現実を仮想現実化」できるワークですが、このノウハウは、私が、欧米で学んだ OS 的ノウハウで、私自身は、無意識的、経験則的に身につけた技能だったので、このノウハウを独自開発の「RPG ゲーム」ワークとして明示化することができた時点より前、たとえば、2001 年から 2013 年まで資格認定ビジネスとして NLP を教えていた時期に、この「暗黙知」のノウハウを北岡ワークの受講者の方々に教えることはできませんでした。

また、数年前に、私のメンターで友人でもある NLP 共同創始者のジョン グリンダー氏に国内でお会いした時、同氏に『RPG ゲーム』のようなテクニックは、欧米人の NLP 実践者は誰でもできているのに、日本人のために私が公式化した、ということについては、欧米人は『猫も杓子も、子供もできていることなのに、なぜわざわざ「演習手順」として明示化しなくてはいけないのか』と言って嘲笑されるでしょうね』と伝えたら、「確かに、他の欧米人は笑うでしょうが、私は『ブラボー！よくやってのけましたね』と言ってあげたいです』と言われました (!)。

5) 結論としては、「RPG ゲーム」ワークは、日本人はもとより、該当のプロセスを無意識的に行なっていて明示化できない欧米人も開発できなかったワークなので、これだけとつても、メタ心理学は、単なる NLP の「化粧直し」である、とは言えない根拠となっています。

さらに、過去数年間、私は、ロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」ワークに多大な影響を受けたり、コーチで精神世界に精通された石井久二氏との「河口湖ワーク Ustream 対談」(<https://youtu.be/8bfinuWWWoQ>) の中から「現象界と神的意識の間での止揚統合ワーク」についての洞察をもったり、ある知人からもらった「北岡ワークは、悟りとか化学的変性意識をすでに体験していない人にもその状態を達成させることができるのか (= レモンの味を知らない人にレモンの味を味わさせることができるのか)」という命題に応える形で、メタ心理学メソッドの各テクニックを独自開発してきているのですが、これらのことについては、「メタ心理学メルマガ創刊キャンペーン」開始時の恩典として予定している「北岡書き下ろし新エッセイ」で詳しく解説させていただきたいと思っています。

6) ちなみに、「メタ心理学メソッドの各テクニック」についてですが、「メタ心理学」プロパーの演習ワークとして、「RPG ゲーム」、「ピーク エクスペリエンス体感ワーク」、「明鏡止水ワーク」、「刺激と反応の間にスペースがある」、「天命を知る」、「曼荼羅フラクタル リエン지니어リング (MFR)」、「鏡の国のアリス」、「Meta Meta

Work」、「サルバドール ダリの燃える麒麟」といったワークが、これまでに独自開発されてきています。

なお、これらのテクニックを通じて、「ボディ／マインド／スピリットの整合」というおそらく「未曾有のこと」が達成できることが確認されてきています。

本エッセイの以下の部分では、上記の引用の以下の部分について、詳しく解説したいと思いました。

「さらに、過去数年間、私は、ロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」ワークに多大な影響を受けたり、コーチで精神世界に精通された石井久二氏との「河口湖ワーク Ustream 対談」(<https://youtu.be/8bfinuWWWoQ>) の中から「現象界と神的意識の間での止揚統合ワーク」についての洞察をもったり、ある知人からもらった「北岡ワークは、悟りとか化学的変性意識をすでに体験していない人にもその状態を達成させることができるのか (= レモンの味を知らない人にレモンの味を味わさせることができるのか)」という命題に応える形で、メタ心理学メソッドの各テクニックを独自開発してきているのですが、これらのことについては、「メタ心理学メルマガ創刊キャンペーン」開始時の恩典として予定している「北岡書き下ろし新エッセイ」で詳しく解説させていただきたいと思っています。」

1) ロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」ワークについて

ロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」ワークについては、2016 年 9 月執筆の「北岡泰典特別書き下ろしエッセイ」の「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論:完全解説」で詳述されていますが、要約すると、以下のようになります。

私が提唱する「メタ心理学」が生まれた背景としては、いろいろな導師、哲学者、認識論者、自己啓発系の教師等の教えに大きな影響を受けてきていますが、その一つに、ロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」というメソッドがあります。私は、知り合いの方のワークショップで、「シャインフェルドの方法論は、絶対脱出不能の『マトリックス』からの脱出法である」という紹介を通じて、このメソッドのことを知るようになりました。

シャインフェルドの本によれば、この世の中には「神的意識」(サンスクリット語で言う「プルシャ」)と「現象界」(サンスクリット語で言う「プラクリテ

ィ」)の二つの世界があり、人間は、生まれたときは純粹神意識に在るが、大人になる過程で、そのエネルギーが現象界に吸い取られ続けて、そのことによって、ホログラフィー的な性質をもった現象界がその人の「内的現実」になってしまっているだけなので、逆に、現象界から神意識にエネルギーを取り戻すためのマントラを唱え続けると、どんどんその現象界は消えていき、最終的に神意識だけが残ることで、「通常は絶対に外に出れないと思われている『マトリックス』から脱出する」ことが可能になります(この「ザ プロセス」のメソッドの要約は、私の理解に基づいた主観的表現です)。

このシャインフェルドのメソッドに影響を受けた私は、その後、「現象界」(すなわち「仮想現実」)から自分を外に出すシミュレーション操作をして、その現象界の外に出た自分に、「神意識」(「メタ意識」)の視点から、NLP テクニックが実践できるように「訓練」して、その後、新しいリソースを得た自分を現象界に戻すことで、今まで「現実」だと思っていた世界を「仮想現実化」することができ、かつ、その仮想現実を、自分の思うままに変えることを可能にさせる「RPG ゲーム」というテクニックを独自開発することに成功しました。

(以上の要約は、「北岡 FAQ61: メタ心理学はマトリックスからの脱出法か?」(<https://www.meta-psychology.info/work/#faq061>)からの部分編集引用です。)

私の記憶では、2015 年くらいに「エグゼキューティブ ライフ コーチング」の個人セッション クライアントの方から「私には、北岡さんの NLP テクニックの実際の現場での落とし込み方がわかりません」という質問を受けた後、「RPG ゲーム」を独自開発できたのは、(2015 年頃知るようになった) シャインフェルドの「神意識は、(幼児期から) 現象界にエネルギーを吸い取られているので、現象界がその人の内的現実になってしまっているだけなので、逆に、現象界から神意識にエネルギーを取り戻したら、最終的に神意識だけが残る」というコンセプトに基づいていたと思います。

このシャインフェルドの「ザ プロセス」に基づいた私の「RPG ゲーム」ワークの独自開発については、以下の二点を追加言及することができます。

1) 「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論:完全解説」のエッセイにもあるように、ザ プロセスと NLP には、以下の相関関係があることが発見されていました。

「ザ プロセス」	NLP
純粹意識	メタ（純粹観照者）
場（フィールド）	演習の仮想現実の場
パターン	選択点
エネルギー	メタからの観察と介入

また、2015 年当時、私は、ザ プロセスと NLP には上記のような相関関係があることを発見した一方で、「NLP の選択点（チョイス ポイント）における新しい『行動選択肢』の選択のし方は『水平的変化』である反面、ザ プロセスの『パターン』において現象界から神的意識にエネルギーを取り戻す過程では『垂直的変容』が可能になっている」という発見もしていました（このことは、後述のコーチの石井久二氏との対談から得ることができた洞察とも関連しています）。

2) ザ プロセスの「現象界に吸い取られていたエネルギーを神的意識に取り戻す」というモデルは、最新の私の独自開発の「刺激と反応の間にスペースがある」ワークでも採用されています。

このことについては、次章の「31. 扁桃体 vs 視床下部／脳下垂体」の項目で解説することにいたします。

2) 「現象界と神的意識の間での止揚統合ワーク」について

私は、2010 年夏に河口湖合宿「無意識活性化」ワークを開講したのですが、そこに参加されていたコーチで精神世界に精通された石井久二氏と「Ustream 対談」ビデオ収録を行いました。

この収録ビデオは、現在、<https://youtu.be/8bfinuWWWoQ> で Youtube 動画として閲覧可能ですが、この動画の中で、私が「自分の中のポジティブな部分（『正』）とネガティブな部分（『反』）を止揚統合して『合』を作り、その『合』が再び『正』となつて、新たな『反』と止揚統合して『合』を作るということを永遠に繰り返すことが、般若心経の『羯諦羯諦、波羅羯諦（行って、行って、行きまくれ）』の『永遠の自己拡張』のプロセスです」と言ったら、石田氏は「そのプロセスに北岡さんは飽きないのですか？」と

おっしゃられました（実際には、そういう正確な質疑応答はなかったかもしれませんが、少なくとも、意味合いは、そういうものでした）。

私自身、そのとき、内心、滝打ちもされる瞑想家でもある石田氏は「では、現象界内での『エナンシオドロミア』（ユングの用語で、『二律背反、多重人格症の反転の繰り返し』を意味します）に飽きないのだろうか」と思った次第でした。

ただ、その後、内省を続けた結果、石田氏は、「北岡式の『現象界』の中の止揚統合のプロセスにはきりが無い一方で、瞑想等で直接『彼岸の神的意識』に行ったら、現象界そのものが一挙になくなるので、その方が手っ取り早い」ということを意味していたのではないかと、思うようになりました。

実は、この洞察は、（石田氏と対談した）2010 年にもったものでしたが、その後、この洞察は数年かけて「熟成」され、2015 年になって、「NLP の選択点（チョイス ポイント）における新しい『行動選択肢』の選択のし方は『水平的変化』である反面、ザ プロセスの『パターン』において現象界から神的意識にエネルギーを取り戻す過程では『垂直的変容』が可能になっている」という私のスタンスの変化につながっていった、と見ています。

これに関連しては、「RPG ゲーム」を開発した後、私のワークでこの演習を紹介した時、一人の参加者の方から、「北岡先生は、これまでは、『現象界内』での『羯諦羯諦、波羅羯諦（行って、行って、行きまくれ）』をやっていましたが、とうとう『現象界と神的意識の間』の『羯諦羯諦、波羅羯諦』を行い始めましたよね」という、極めて妥当なコメントをいただきました。

（ちなみに、興味深いこととして、「西海岸文化圏人（すなわち、認識的拡張主義者）」は、すでに現象界を超えたもの（レモンの味）を知っているケースが多いので、NLP 的な「水平的変化」の方法論の「変化軸」を 90 度変えて、自分自身の「垂直的変容」を実現するために使うことができたが、現象界を超えたもの（レモンの味）を知っているケースがほとんどない日本人が「水平的変化」の方法論である NLP をどれだけ使っても、現象界を超えた世界への「垂直的変容」ができないのは、むべもないことだ、ということが発見されています。

もちろん、この NLP の限界性を克服する目的で、メタ心理学が創始されたわけです。)

3) メタ心理学はレモンの味を知らない人にレモンの味を味わさせることができるか？

私は、ある知人から何度も、「北岡ワークは、悟りとか化学的変性意識をすでに体験していない人にもその状態を達成させることができるのですか (= レモンの味を知らない人にレモンの味を味わさせることができるのですか)?」という質問を受けてきていました。

正直、メタ心理学創始以前の私は、このことは不可能である、という立場にいましたが、メタ心理学創始後は、これは可能である、と主張してきています。

この主張の一番の根拠は、以下の通りです。

私は、「NLP ナンバースリー」のロバート デイルツのワークで、フロアー上に、「メタ (観照者、英語で言う **Witness**)」としての付箋紙を置き、その付箋紙の後ろに、もう一枚の「メタメタ」の付箋紙を置き続ける、という「永遠のメタの後退」というモデルに出会いました。

(ちなみに、このモデルには、以下の意味合いがあります。

1) ゲーデルの「不完全性理論」によれば、「完全な系は存在しない」ことが証明されているので、「永遠に拡張していくメタ (表出者) の存在」が可能になります。

2) 二枚の合わせ鏡で、無数の自分の顔が永遠に後退していくのを見ることができますが、鏡と自分の顔の角度上、一番奥の自分の顔は絶対見えないはずで

私は、この一番奥の自分の顔が神である、と定義しています。

3) 苦米地英人氏は、神は完全であるべきである一方で、ゲーデルの「不完全性理論」によれば「完全な系は存在しない」ので、「神は死んだ」ことが証明された、と主張していますが、私は、世の中にたった一つだけゲーデルの「不完全性理論」が適当されないものがあって、それは「鏡の中の一番奥の自分の顔」である「神」なので、逆に、ゲーデルの「不完全性理論」は、(消極的に) 神の存在を証明した、と主張しています。)

ある時、このデイルツ式の「永遠のメタの後退」というモデルをグリンダー氏に言及したことがあったのですが、同氏は「それでは、付箋紙の製造会社の **3M** を儲けさせるだけだ」という冗談を言った後、次の名言を吐かれました。

「私は、ミニマリストなので、そのような『愚行』はしません。私は、『メタ』を表出する一つの付箋紙だけを使い、その上に無数の『メタメタ』を置いていきます。」

私は、この名言を耳にした以前は、「現象界 vs 神的意識 (メタ)」の二元論の視点から考えていたので、「All or Nothing」的に、メタには「完全純粹意識」しか存在していない、と考えていました。

ただ、この名言を聞いた後は、「メタには、一番下に現象界寄りのメタがあり、一番上には神寄りのメタがある」という「無数のグラデーションのあるメタ」というモデルを使うようになりました (ただし、肉体をもっている人間は、生きているかぎり、「100% 神であるメタ」をもつことはできない、と私は考えています)。

このモデルと「現象界と神的意識の間での止揚統合」のモデルを組み合わせることで、メタ心理学者としての私は、私が独自開発した「RPG ゲーム」や「Meta Meta Work」等で、徐々に自分自身の「神的意識の視座」を上げていって、最終的に、メタ心理学メソッドの実践者が、神に最も近い「メタ力」を身につけることが可能になっている、と考えています。

以上が、「北岡ワークは、悟りとか化学的変性意識をすでに体験していない人にもその状態を達成させることができる」ことの根拠となっています (ただ、この知人には、「ただし、メタの一番上の視点まで行くのに、何億年かかるかはわかりません」という「但し書き」を伝えています (笑))。

私は、「現象界と神的意識の間での『羯諦羯諦、波羅羯諦』」を可能にする、「OS ソフト」的なメタ心理学メソッドを通じて、日本人の方々でも、本来的には「水平的変化」しか引き起こさない NLP を使っても、「垂直的変容」が可能になった、という主張をさせていただきます。

2. 「自己啓発難民状態」から「真の成功者状態」への変容を可能にする実践的「メタ心理学」

現在配信中の「メタ心理学」メルマガ第五号で「『メタ心理学』誕生の経緯について」(<https://www.kitaoka.co/newsletter/005.htm>) の「後半部」で、以下のように書かせていただきました。

以上が、メタ心理学が、NLP の焼き直しではなく、「ブランドニュー」のメソッドであることの根拠でしたが、もう一点、関連事項をお伝えさせていただきたいと思いました。

それは、2016 年 5 月 9 日に配信されたメルマガ『新・これが本物の NLP だ！』の「新編第七十四号:「自己啓発難民」から「成功哲学者」に変わる奥義発見！」にある、以下の『自己啓発難民』と『真の成功哲学者』の相違相関図」についてです。

「自己啓発難民」と「真の成功哲学者」の相違相関図

三日坊主	新しい習慣の永続化
「魔法の杖がほしい」	「努力を惜しまない」
「隣の芝生はより青い」	「皆、人間は同じ」
「自分のいいところだけ見ていたい」	「自分の弱点も認められる」
二元論	非二元論
五感の世界を信じる	五感の世界を無視できる
現実と非現実があると信じている	すべて仮想現実だと知っている
大いなる勘違いができない	大いなる勘違いができる
プログラミングの犠牲者	プログラミングの操作者
ボックスの中	ボックスの外
現象界	観照者
自分のアイデンティティの絶対化	自分のアイデンティティの相対化
他者依存・他力本願	独立・自力本願
反応 (同じことの繰り返し)	創造
記憶	想像
結果	意図
コンテンツ	プロセス
マインド	メタマインド

この相関図（今回、新たに『自己啓発難民状態』と『真の成功者状態』の相違相関図」に名称を変えたいと思います）を作成した時までには、私はすでに「RPGゲーム」ワークを開発していたと思いますが、体系化された「メタ心理学」の各テクニックをまだ開発していなかった時でしたので、上記の「自己啓発難民状態と真の成功者状態の相違」を指摘できはしましたが、このような変容（すなわち、相違相関図の左側から右側へのマインドセット（状態）の変化）を可能にする、実際に有効性のあるノウハウ群を、まだ提示できていない状況でした。

なので、当時、この「相違相関図」を目にしたメルマガの読者の方々は、（まだ具体的な方法論を開発しきれていなかった）北岡は「なぜ人々は自己啓発難民から真の成功者になることができないのか」という「恨み節」を吐いている、としか思えなかった可能性があります。

しかし、その 7 年後、メタ心理学を創始した今は、私は、声高らかに、「北岡は、メタ心理学によって、人々を自己啓発難民状態から真の成功者状態に変容させる実践的ノウハウを開発しました！」と宣言することができます。

特に、上記の『自己啓発難民状態』と『真の成功者状態』の相違相関図（18 項目）については、この 7 年間の神経科学、成人発達論の独自研究に基づいて、以下のような『自己啓発難民状態』と『真の成功者状態』の相違項目群（15 項目が追加され、計 33 項目）を追加できるようにもなっています。

「自己啓発難民状態」と「真の成功者状態」の相違相関図（追加項目群）

Think of	Think from
意識と無意識のラポールなし	意識と無意識のラポールあり
意識的	無意識的
チョイスポイントなし	チョイスポイントあり
NLP < 現実	NLP > 現実
現状維持者	認識的拡張主義者
盲目的信仰	懐疑主義
二律背反（葛藤）	（正反合の）止揚統合
仮想現実	神的意識
ビッフォアー	アフター
水平的変化	垂直的変容

デカルト／ニュートンのパラダイム	量子力学的パラダイム
扁桃体	視床下部／脳下垂体
ノルアドレナリン	ドーパミン
緊張	弛緩

私は、メタ心理学のメソッドとノウハウを通じて、以上の **33** 項目における「自己啓発難民状態から真の成功者状態への変容」が可能になる、と主張していますが、このような革新的なメソッドに興味をもたれた方には、北岡の体験個人セッションの受講をお勧めいたします。

また、「メタ心理学メルマガ創刊キャンペーン」開始時の恩典として予定している「北岡書き下ろし新エッセイ」で、これら **33** 項目の比較相違点についての解説をさせていただきたいと思っていますので、ご興味のある場合は、ぜひ、キャンペーンに参加されて恩典のエッセイを読んでいただきたいと思います。

乞うご期待ください。

ということなのですが、本エッセイでは、**2016** 年作成の「『自己啓発難民』と『真の成功者』の相違相関図」(**18** 項目)と今回のメルマガで紹介した「『自己啓発難民状態』と『真の成功者状態』の相違項目群」(**15** 項目)の計 **33** 項目の「統合相関図」を作ってみました (次ページを参照)。

また、本エッセイでは、**34** から **38** までの項目として、さらに **5** つの項目を追加した表になっています。全部で **38** 項目となっています。

(新しい「相関図」の項目の順序は、当初の順序とは入れ替わっているケースがあります。)

おそらく、**1** から **10** までの「相違項目」については、特に説明は不要と思われますので、次々ページから、**11** から **38** までの相違項目について、私なりの解説を加えたいと思っています。

「自己啓発難民状態」と「真の成功者状態」の相違相関統合図 (2023/9/5 作成)

1	三日坊主	新しい習慣の永続化
2	「魔法の杖がほしい」	「努力を惜しまない」
3	「隣の芝生はより青い」	「皆、人間は同じ」
4	「自分のいいところだけ見ていたい」	「自分の弱点も認められる」
5	五感の世界を信じる	五感の世界を無視できる
6	他者依存・他力本願	独立・自力本願
7	ボックスの中	ボックスの外
8	自分のアイデンティティの絶対化	自分のアイデンティティの相対化
9	反応 (同じことの繰り返し)	創造
10	プログラミングの犠牲者	プログラミングの操作者
11	現実と非現実があると信じている	すべて仮想現実だと知っている
12	大いなる勘違いができない	大いなる勘違いができる
13	現象界	観照者
14	記憶	想像
15	結果	意図
16	コンテンツ	プロセス
17	マインド	メタマインド
18	二元論	非二元論
19	Think of	Think from
20	意識と無意識のラポールなし	意識と無意識のラポールあり
21	意識的	無意識的
22	チョイスポイントなし	チョイスポイントあり
23	NLP < 現実	NLP > 現実
24	現状維持者	認識的拡張主義者
25	盲目的信仰	懐疑主義
26	二律背反 (葛藤)	(正反合の) 止揚統合
27	仮想現実	神的意識
28	ビッフォアー	アフター
29	水平的変化	垂直的変容
30	デカルト／ニュートンのパラダイム	量子力学的パラダイム
31	扁桃体	視床下部／脳下垂体
32	ノルアドレナリン	ドーパミン
33	緊張	弛緩
34	波	大海
35	思考停止	目利き力
36	知らないことへの恐怖	知らないことへの好奇心
37	他人の操作	誠実な影響
38	一喜一憂状態	万事塞翁が馬

11. 現実と非現実があると信じている vs すべて仮想現実だと知っている

この対比は、「人間は、三次元の世界にオギャーと生まれ、死ぬ時に、この世界から去っていく」という 400 年前の「デカルト／ニュートンのパラダイム」に生きているのか、「現実というものは、瞬間瞬間に生まれては死滅していて、我々の意識が瞬間瞬間の現実を構築し続けていっている」という 20 世紀以降の「量子力学的パラダイム」に生きているのか、の違いを表しています。

私は、「西海岸文化圏人 (すなわち、認識的拡張主義者)」は後者のパラダイムの中に生きていて、日本人は前者のパラダイムの中に生きている、と見ています。

もちろん、1988 年以前の、最下層の「自己啓発難民状態」にいた私自身も、80 年代以降、欧米で実際に「西海岸文化圏人」に出会うまでは、「デカルト／ニュートンのパラダイム」だけが真理で、それ以外はありませんと信じ込んでいた日本人の一人でした (そして、そのことが、1988 年までの私の人生で、不幸を生み出している最大の「元凶」になっていました)。

12. 大いなる勘違いができない vs 大いなる勘違いができる

「大いなる勘違い」は、苦米地英人氏の表現です。

通常、「自己啓発難民状態」の人は、「真の成功者状態」を外から考えているので (これは、「Think of」状態と呼ばれています)、絶対に「真の成功者状態」を維持できない、と言われています。

常に、「真の成功者状態」にいる人は、その状態から考えて (これは、「Think from」状態と呼ばれています)、「自分はすでにすごいんだ」という「大いなる勘違い」をし続けることができる人です。

13. 現象界 vs 観照者

印哲では、「神的意識」(サンスクリット語で言う「プルシャ」)と「現象界」(サンスクリット語で言う「プラクリティ」)の二つの世界がある、と提唱されています。

メタ心理学では、「神的意識」と「絶対的観照者（英語では『Absolute Witness』）」は同義語として使われています。

また、「現象界」は「仮想現実」と同義語なので、この対比は、「27. 仮想現実 vs 神的意識」と同じ意味をもっています。

14. 記憶 vs 想像

この対比の「記憶」は、たとえば、1983 年のインド人導師への弟子入り以前の、最下層の自己啓発難民状態にいた私は、高校時代フロイト式 of 精神分析にハマリ、大学時代はマルセル プルーストの小説『失われた時を求めて』の世界に没頭し、ベクトルが「過去の記憶」（特に、幼児期のトラウマの体験の記憶）にしか向いていなかったことと関連しています。

1983 年以降、特に、1988 年に NLP を学び始めてからは、私は、「大いなる勘違いができる、真の成功者状態の人間になったのですが、これは、当初は単なる「想像」だったものが、常にそこから物事を考えていたら（「Think from」していたら）、その想像されていた状態がやがて「現実」になった、とすることが可能です。

15. 結果 vs 意図

「意図／結果」は、NLP 共同創始者のジョン グリンダー氏が提唱したモデルで、現象界で起こっている事象（「結果」）は必ず（現象界を超えた）「意図」から生まれている、とされています。

このモデルに基づいて、「6 ステップ リフレーミング」のような無意識ワークが開発されてきています。

このモデルは、「現象界（仮想現実）vs 神的意識（観照者）」の対比とも関連しています。

16. コンテント vs プロセス

この対比は、たとえば心理療法のセッションを受けるクライアントの問題（コンテント）は、それを作り出している「プロセス」あるいは「パターン」があって、その「プロセス」あるいは「パターン」を変えないかぎり、問題のコンテントがなくならない、という考え方に基づいています。

アインシュタインは、「問題は、その問題を作り出した思考と同じレベルの思考では解決されない」と言ったとされていますが、まさにこの対比のことを示唆しています。

もちろん、「コンテント vs プロセス」は、「現象界 vs 観照者」、「結果 vs 意図」と対応しています。

17. マインド vs メタマインド

この対比については、「18. 二元論 vs 非二元論」を参照してください。

18. 二元論 vs 非二元論

私は、英国にいた三十代に、煙草を完全禁煙しましたが、このきっかけになったのは、英国の深夜番組での「喫煙派 vs 禁煙派」の視聴者参加型グループ討論の番組でした。この討論の内容は、本当に「低級」で、私は、反吐が出るほどの極端な嫌悪感に襲われました。それまでも何度か禁煙と喫煙を繰り返していましたが、このときばかりは、あまりの嫌悪感に、あまりにもくだらないこれら両方の立場を「金輪際超越」してみたいと心底から思いました。そのとき、ふと、現象的に、仮にもし煙草を吸い続けた場合、決定的に、否定できない形で自分は喫煙派に分類されざるをえないが、仮に煙草を吸うという行為を現象的にしない場合、確かに禁煙派と分類される可能性もあるが、同時に、喫煙派と禁煙派の両方を超えた、NLP でいう「メタ」の立場と分類される可能性もある、少なくとも、煙草を吸うかぎりその「超越の立場」に立つことは論理的に絶対不可能だ、という思いに至りました。この思いが、私を完全禁煙させたという次第でした。

この出来事が、「ノーマンド → マインド → メタマインド」のモデルを作るきっかけとなりました。関連する対応表の図を、以下に示します。

Meta Mind Work 対応表

北岡ワーク	印哲等	トランスパーソナル心理学	機能	論理性
メタ マインド	超意識	超自我	自己と非自己の再統合	非二元論
↑	↑	↑	↑	↑
マインド	意識	自我	自己と非自己の分離	二元論
↑	↑	↑	↑	↑
ノーマインド	無意識	前自我	自己と非自己の未分化	一元論

Copyright©2010 by Taiten Kitaoka. All rights reserved internationally.

19. Think of vs Think from

私は、一時期、「ニューソート系」のジョゼフ マーフィーの師匠と見なされてされているユダヤ人のネヴィル ゴダードを研究しました。

ゴダードによれば、自分の「天命」（ゴダードは、通常は「欲望」と訳される「Desire」という言葉を使っています。文語では「望みのもの」という意味合いがあるようです）を生ききっている人は「神の意識」にいて、天命を生ききっていない人は「罪の意識」にいる、と言っています。彼によれば、「天命」を生ききっていない人が生ききるようになることが「贖罪」だ、とも言っています。

彼の主張でもっとも興味深いと思ったのは、「Think of vs Think from」の対比でした。

「Think of」は、たとえば、セミナー参加者が、セミナーの先生について「この方はすごい。自分はそのレベルまで行っていない」と思った瞬間、その先生について「外から見ている (Think of している)」ので、ゴダードは、「その人は絶対に、未来を含めて、その先生のようにはなれない」と、厳しく「断罪」しています。すなわち、「Think of」は「自己啓発難民状態」に対応しています。私自身は、これは的を射た名言だと思います。

一方で、ゴダードによれば、「真の成功」を収める人は、初めから「目標状態になっている」という「大いなる勘違い」をしている人で、そういう人は「真の成功者状態」から物事を考えている（「Think from」している）ので、成功し続ける、ということになります。

20. 意識と無意識のラポールなし vs 意識と無意識のラポールあり

NLP の父である、催眠療法の世界的権威だったミルトン H. エリクソンは、以下の名言を残しています。

「身体的療法と心理的療法のいずれにおいても、クライアントがセラピストに来る唯一の理由は、その人の内部で、意識と無意識の間のラポールが欠如しているからです。

その人の内部で、意識と無意識の間のラポールが形成されていたら、その人は、そもそもセラピーに来る必要はないです。」

私は、エリクソンに「激しく同意」します。

21. 意識的 vs 無意識的

私がこの対比を「相違相関図」に含ませた理由は、私は、「『自己啓発難民状態』の人は、『意識から Think from している』人である一方で、『真の成功者状態』の人は『無意識から Think from している』人なのではないか」と思ったからです。

つまり、「自己啓発難民状態」の人は、「結果 vs 意図」モデルの結果である意識がすべてである、と考えている人である一方で、「真の成功者状態」の人は、いついかなるときも、自分の意識は、「意図」である広大な「無意識」（場合によっては、「アカシック レコード（阿頼耶識）」まで拡張される可能性があると思っています）から刹那的に生まれる産物である、ということがわかっている人である、ということになります。

この対比は「36. 知らないことへの恐怖 vs 知らないことへの好奇心」の対比とも関係しています。

22. チョイスポイントなし vs チョイスポイントあり

「チョイスポイント (選択点)」は、美術館巡り PC ソフトの「移動するカーソルの視点」あるいは Google マップの「360 度回転可能なポイント」のことです。

1988 年に、私が NLP にハマった最大の理由は、当時、NLP 共同創始者のグリーンダー氏がワークショップ参加者に「諸君、実は、現実の生活にもチョイスポイントがあります」と言った一言でした。

このチョイスポイントは、以下の「刺激と反応の間にスペースがある」を示す私の会社のロゴと関連しています。



**Between stimulus and reaction
there is a space.**

すなわち、この入力矢印がブラックボックスと接している部分が「チョイスポイント」で、幼児期に複数の選択肢を入力できたのに、大人になると、通常は、一つの入力習慣化された後、他の選択肢が取れなくなってしまう。この状態は「刺激と反応の間にスペースがない」状態になっています。つまり自己啓発難民状態の「ロボット人間」となっています。

23. NLP < 現実 vs NLP > 現実

この対比の意味は、幼児期に「現実」と思われるものが形成される際、元々は、チョイスポイントとして無数のプログラミングをインストールする可能性があったのに、「習慣化」のせいで、たった一式のプログラミング群だけが自分の脳神経細胞系統群に残り、それが、大人になって「現実」と思い込むようになっているだけだ、という意味です。この場合は「NLP < 現実」の状態で、

「意識の革命」を契機として起こった、現代のインターネット革命、IT 革命、分子生物学 (DNA／遺伝工学) 革命、等の歴史の流れにも、この認識的拡張主義が綿々と継続されてきている、と私は、考えています。

25. 盲目的信仰 vs 懐疑主義

私は、1983 年にインド人導師に弟子入りしましたが、私の瞑想の修行において、師匠から言われたことを「盲目的に信じる」ということはありませんでした。

私は、ケン ウィルバーが『目には目を』で提唱した「妥当なデータ蓄積の 3 要素」に基づいて、「真理はどのように確認されるか」について、以下の 3 ステップ手順を提唱しています、

1. 命令。これは、たとえば、「もしこれを行えば、それを獲得します」というような、(命令内容の妥当性を) 知っている者による指示です。
2. 個別確認。命令に従った人が命令内容の妥当性を自分自身のために確認します。
3. 共同確認。命令に従った一定数の人々が、命令内容の妥当性に関する自分自身の確認を相互共有し、この時点で、命令内容がこれらの人々が属するグループの中で真理として見なされるべきことになります。

科学的な真理の確認 (科学者は、同じ条件下で実行される反復実験で同僚が同じ結果を得ることに重く依存しています)、ユークリッド幾何学の公理、(「現代で最も偉大な 1 人のファッション デザイナー」ではないにしても) 「現代で最も偉大な複数のファッション デザイナー」の確定、政治的運動の盲目的な追従等を始めとして、この手順はどのような領域においても機能しているように思われます。

すなわち、自己啓発難民状態の人は、権威者と自分が見なしている人から言われたことを「盲目的に信じる」傾向がある一方で、真の成功者状態にいる人は「徹底的懐疑主義者」として、他の成功していると思われる人の「命令」を実践して、自分自身で、その妥当性の是非について「個別確認」ができる人である、と定義できます。

26. 二律背反 (葛藤) vs (正反合の) 止揚統合

精神分析家のユングは「エナンシオドロミア」という用語を提唱していますが、これは、「二律背反あるいは多重人格症の両極の各要素がシーソーゲームのように、ある時は一つの要素が現れ、次の瞬間にはもう一方の要素が現れ続けて、両要素の反転の繰り返しが起こるだけで、いっさい統合が起こっていない」状態を指しています。

メタ心理学では、NLP テクニックに基づいて、このような「エナンシオドロミア」の両極要素を「止揚統合」して、「自己アイデンティティの永続的拡張」を可能にするワークが複数開発されてきています。

27. 外仮想現実 vs 神的意識

この対比については、「13. 現象界 vs 観照者」の項目を参照してください。

28. ビッフォアー vs アフター

私自身、数多くの NLP 学習者に施術してきていますが、「NLP 学習、特に特定の NLP 演習体験、の以前と以後の『ビッフォアー／アフター』の差分を取っていましたか」と聞いた際、「取ったことはありません。取り方がわかりません」といった返事をもらうことが多く、正直、「驚愕」してきています。この差分を取らずして、NLP の効果の測定と検証は、いっさい不可能だからです。

「ビッフォアー／アフター」の差異が取れない場合は、おそらく自分が劇的に変わっていたとしても、それを認識できていない可能性があります。

これについては、成人発達論者のジャン ピアジェが行った非常に興味深い実験があります。

ピアジェによれば、3 ～ 4 歳前後の子供は、全世界全員、大きなペット ボトルと小さなペット ボトルを見せられ、中に入っている水を一つのボトルから他のボトルに入れ替えるというプロセスを繰り返されると、「大きなボトルに入っていた時の水の方が、分量が多い」としか言えない、ということです。

同じ子供が、2、3 年後に、その時の実験光景を録画していた収録ビデオを見せられると、「こんな馬鹿なことを僕が言うわけではない。このビデオは編集されていて、僕を騙そうとしているのですよね」としか、言えない、ということです。

すなわち、人間は、あるパラダイムで考えていたことは、別のパラダイムの思考様式に移った後は、前のパラダイムで考えていたことは考えられられないようになっているようです。

なので、「ビッフォアー／アフター」の差異をとっていない人は、「アフター」のパラダイムの中でしか考えることができないので、「ビッフォアー」の状態は完全記憶喪失している、ということになります。

29. 水平的変化 vs 垂直的変容

この対比については、本エッセイの 9 ページの以下の部分を参照していただきたいと思いました。

その後、内省を続けた結果、石田 [久二] 氏は、「北岡式の『現象界』の中の止揚統合のプロセスにはきりが無い一方で、瞑想等で直接『彼岸の神的意識』に行ったら、現象界そのものが一挙になくなるので、その方が手っ取り早い」ということを意味していたのではないかと、思うようになりました。

実は、この洞察は、(石田氏と対談した) 2010 年にもったものでしたが、その後、この洞察は数年かけて「熟成」され、2015 年になって、「NLP の選択点 (チョイスポイント) における新しい『行動選択肢』の選択のし方は『水平的変化』である反面、ザ プロセスの『パターン』において現象界から神的意識にエネルギーを取り戻す過程では『垂直的変容』が可能になっている」という私のスタンスの変化につながっていった、と見ています。

これに関連して、「RPG ゲーム」を開発した後、私のワークでこの演習を紹介した時、一人の参加者の方から、「北岡先生は、これまでは、『現象界内』での『羯諦羯諦、波羅羯諦 (行って、行って、行きまくれ)』をやっていましたが、とうとう『現象界と神的意識の間』の『羯諦羯諦、波羅羯諦』を行い始めましたよね」という、極めて妥当なコメントをいただきました。

(ちなみに、興味深いこととして、「西海岸文化圏人 (すなわち、認識的拡張主義者)」は、すでに現象界を超えたもの (レモンの味) を知っているケースが多いの

で、NLP 的な「水平的変化」の方法論の「変化軸」を 90 度変えて、自分自身の「垂直的変容」を実現するために使うことができたが、現象界を超えたもの（レモンの味）を知っているケースがほとんどない日本人が「水平的変化」の方法論である NLP をどれだけ使っても、現象界を超えた世界への「垂直的変容」ができないのは、むべもないことだ、ということが発見されています。

30. デカルト／ニュートンのパラダイム vs 量子力学的パラダイム

この対比については、「11. 現実と非現実があると信じている vs すべて仮想現実だと知っている」の項目を参照してください。

31. 扁桃体 vs 視床下部／脳下垂体

私は、トラウマや PTSD の症状と「『扁桃体』の『暴走』」が関係していることを知った後、過去数年間、扁桃体の研究の世界的権威である神経科学者ジョゼフ ルドゥー氏を研究してきました。

その扁桃体を含む神経科学の研究の後、現在の私は、トラウマや PTSD の症状は、該当の人がある特定の五感の刺激を感じた後、脳神経細胞系統群内の電気化学信号が扁桃体に「吸い取られる」から起こっているので、刺激の瞬間まで遡って、その同じ信号を、扁桃体ではなく、たとえば、視床下部や脳下垂体に送り直せば、同じ刺激を前にしても「ドーパミン」しか分泌されないのではないか、という「仮説」を立て、この仮説をもとにして、「刺激と反応の間にスペースがある」というワークを独自開発しました。

このワークについては、以下の二点が指摘できます。

1) この「トラウマや PTSD の症状は、該当の人がある特定の五感の刺激を感じた後、脳神経細胞系統群内の電気化学信号が扁桃体に『吸い取られる』から起こっている所以、刺激の瞬間まで遡って、その同じ信号を、扁桃体ではなく、たとえば、視床下部や脳下垂体に送り直せば、同じ刺激を前にしても『ドーパミン』しか分泌されないのではないか」という仮説は、本エッセイの 6 ページにあるロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」ワークに影響を受けて、立てたものです。

2) 「その同じ信号を、扁桃体ではなく、たとえば、視床下部や脳下垂体に送り直せば、同じ刺激を前にしても『ドーパミン』しか分泌されないのではないか」の仮説の部分については、以下のページにある表を参考にさせていただきました。

<https://www.kitaoka.co/img/dopamine.pdf>

32. ノルアドレナリン vs ドーパミン

「多幸感」を感じさせてくれる「脳内伝達物質」はドーパミンとされていますが、逆に、「激しい感情や強い肉体作業などで人体がストレスを感じたときに、交感神経の情報伝達物質として放出されたり、副腎髄質からホルモンとして放出される物質」はノルアドレナリンということらしいです。

「闘争・逃走反応」で有名な脳内伝達物質はアドレナリンですが、アドレナリンとノルアドレナリンの違いは、以下の通りのようです。

「ノルアドレナリンは、脳内で神経伝達物質として分泌されるため、恐怖や怒り、不安などの精神的な作用にかかわっています。一方、アドレナリンは脳内ではほとんど分泌されず、また、副腎髄質で分泌されたアドレナリンは血液脳関門を通過することができないため、精神的な作用には関与していません。」

私は、真の成功者状態の人々は、常に「多幸感」を感じている人々だと思っています。すなわち、24 時間「ドーパミンのシャワー室」の中にいる人々です。

33. 緊張 vs 弛緩

この対比は、「32. ノルアドレナリン vs ドーパミン」の項目と関連しています。

「ノルアドレナリン」は緊張を生み出し、「ドーパミン」は弛緩を生み出します。

34. 波 vs 大海

この対比は、私の師匠が語っていた比喻です。

現象界にいる自分が本当の自分だと勘違いしている人は、いわゆる「走馬灯的光景」の一つ一つに一喜一憂しているが、この現象界の事象は、すべて、海の表面の波のようなものです。

一方、その現象界を見ている「観照者」は「大海」そのもので、この実体と自己同一化すれば、表面の波の変化にはほとんど影響されない「不動心」をもった存在であることがわかります。

すなわち、自己啓発難民状態が「波」であり、真の成功者状態が「大海」です。

35. 思考停止 vs 目利き力

この対比は、「25. 盲目的信仰 vs 懐疑主義」の項目と関連しているので、この項目を参照してください。

36. 知らないことへの恐怖 vs 知らないことへの好奇心

この対比は「21. 意識的 vs 無意識的」の項目と関連しています。

すなわち、自己啓発難民状態の人は、意識がすべてだと思い込んで、意識との自己同一化の度合いが激しいですが、真の成功者状態の人は、「瞬間から瞬間へと意識を作り出している無意識へのサレンダー（自己放棄）」できる人です。

前者は、自分は「すべて知っていたい」と思い、知らないことに恐怖を覚える傾向にありますが、後者は、海岸に行き、多くの石を見たニュートンのように、「まだ自分の知らない石が無数にあることに畏怖と恍惚感」を感じることができる人です。

37. 他人の操作 vs 誠実な影響

私が翻訳した『ビジネスを成功させるための魔法の心理学』の著者のジェニーラボードは、「相手の人の求める結果（アウトカム）」を無視して自分自身の求める結果だけを念頭に置いて相手を誘導するのは「巧みな操作」である一方で、両者の求める結果の双方を満たす形で相手を誘導するのは「誠実な影響」と言っています。

自己啓発難民状態にある人は、「巧みな操作」をする傾向にある一方で、真の成功者状態にある人は、「誠実な影響」を与える「余裕」ができています。

38. 一喜一憂状態 vs 万事塞翁が馬

「34. 波 vs 大海」でも指摘したように、自己啓発難民状態にある人は、現象界の各事象（「波」）に一喜一憂し続けますが、真の成功哲学状態にいる人は、「達観」した「メタ」の視点（「大海」）を保っていられるので、「万事塞翁が馬」こそが、実際に起こっていることである、ということが体感できています。

以上が、「自己啓発難民状態」と「真の成功者状態」の相違相関統合図の 11 から 38 までの相違項目についての私なりの解説でした。

結論として、本エッセイの 13 ページから、以下の引用をさせていただきたいです。

[2016 年] 当時、この「相違相関図」を目にしたメルマガの読者の方々は、(まだ具体的な方法論を開発しきれていなかった) 北岡は「なぜ人々は自己啓発難民から真の成功者になることができないのか」という「恨み節」を吐いている、としか思えなかった可能性があります。

しかし、その 7 年後、メタ心理学を創始した今は、私は、声高らかに、「北岡は、メタ心理学によって、人々を自己啓発難民状態から真の成功者状態に変容させる実践的ノウハウを開発しました！」と宣言することができます。

3. 後書き

以上が、私の「1988 年以前の最下層の自己啓発難民だった自分自身への『鎮魂歌』」の内容でしたが、いかがでしたでしょうか。

私としては、私の最後のライフワークである「メタ心理学」は、2020 年に始まった「庚子 (かのえね)」の年以降の 60 年間の激動の時代での「ノアの方舟」になるのではないかと、思っています。

もしメタ心理学が世界を救うのではないかと、思ってくださいる方がいたら、今後正式に設立させたい「メタ心理学研究所」を通じて、共同ワーク プロジェクトを企画させていただきたいです。

実は、私のエグゼクティブ クライアントで、

「今、確信していることは、『北岡先生は救世主』であるということです。今、確信をもって、『北岡先生は救世主』だと思っております。あえて、そう思うということもなく自然にそう思っています。

何故かと申しますと、私が悟れたからです。セッションを受けて、私は悟れました。道元禅師も、覚者と一緒に座禅することの重要性を強調していますが、そして、原理としてはわかるのですが、問題は、悟った人にどうやって出会うかということです。今は、この問題は、簡単に解決できます。北岡先生に会えばいいからです。」

とまでおっしゃってくださっている方がいらっしゃいます！

その著『お金持ちになる科学』で、ウォレス ワトルズは、必ず成功する手順がある、と言っていますが、私も、自分自身の過去を振り返ってみて、必ず「自己啓発難民状態から真の成功者状態に変容できる」手順がある、ということを知っています。

このために必要なのは、以下の「リンゴの種」ではないか、と思っています。

「ある貧しい村に、『一切れのリンゴを食べてみたい』と言う少女がいました。そこへ旅人がやって来ました。旅人はその少女に、『私の話を聞けば、あなたも一切れのリンゴを食べられる』と言います。少女は大喜びです。

すると旅人は少女に『いつどこにリンゴの実はなるのか』と話しはじめました。次の日には『リンゴの木はどのように育つのか』、また次の日には『リンゴが好む土・水・空気とは』、さらに次の日には『美味しいリンゴを育てるコツ』を語りました。そして最後の日に旅人は『この命ある種はだれが植えますか？』とだけ問いかけると、一粒のリンゴの種を少女に手渡してその村をあとにしたのです。

それから少女は、リンゴの種を土に植えて、旅人が話してくれたとおりに、リンゴの木を大切に育てました。その木はすくすくと成長し、そしてある年に実った美味しいリンゴを、村人たちみんなに分け合って食べたといいます。」